

---

## 災害図上訓練 (DIG) を行ったA市高校生の防災意識と訓練の効果についての一考察

(造田亮子ほか、日本災害看護学会誌 14: 58-69, 2013)

2014年10月10日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

近年、地震や集中豪雨による水害・台風など自然災害が世界で多発している。災害は誰の身にも起こりうることであり、人と人とのつながりや助け合い、災害への備えの重要性を再認識させられる。本研究では防災セミナーに参加した高校生の防災意識と災害図上訓練 (Disaster Imagination Game: DIG) の効果、若年層の防災意識・地域防災力の向上への手がかりを明らかにすることを目的とし、A市内の高校生向けに防災セミナーを開催し、参加した51名を対象として、防災の知識と防災意識を問い、単純集計と質的に分類した。

A市は人口12万人の都市であり、ここ数年大雪災害や断水、ガス漏れ事故などの災害が続けて発生している。しかし、住民の災害・防災に対する意識・防災に対する意識は低く、A市の日常の防災意識が低いことが明らかになっている。防災活動の1つとして、防災意識を掘り起こし地域の理解を深めて、災害を理解することを目的としたDIGとはDisaster、Imagination、Gameの頭文字を取って名付けられた誰でも行うことができ、誰もが参加できる防災訓練である。A市内では町内会や消防署でDIGを実施しているが、今後の社会を担う高校生を対象にしたDIGの実施や防災意識の調査は行われていない。

アンケートの結果、A市の高校生たちは防災への興味は半数以上が持っているが、セミナーの半数以上は他者からの勧めで参加しており、防災の知識をつけるために積極的に行動しているとは言い切れないことがわかった。防災の知識は約半数は持っておらず、備えをしていない割合が8割以上であった。セミナーに参加した高校生は知識や災害への備えの欠如があり、自分にも起こりうることと認識ができていないことから、災害に対する知識を習得し、災害は自分事でありどのくらいの被害が想定されるか等の知識を深めることで行動に移せるような動機づけが必要であると考えられる。A市の防災のしおりによると、日ごろの備えとして危険個所の確認、一時避難場所、避難所の確認、避難経路の確認、災害時要援護者への手助けの準備、非常備蓄品の準備、非常持ち出し品の準備、町内会で協力して助け合うこと、家具の固定などの地震対策をすること、洪水、強風対策をすること、居住地区の予想震度、土砂災害の特徴、津波災害の特徴を知っておくことが重要であるとしている。A市内では防災教育を取り入れていないことから、災害についての知識は薄く、高校で災害教育を行うことや町内会で防災教育を行うなど、A市内に居住する高校生全体が正しい知識を持ち、すでに持っている知識を普及させることも大切である。

避難所・避難場所の理解については家や学校周囲の避難所など半数以上が知っていた。しかし、災害はいつ遭遇するかわからないため、常に避難場所を意識できることが必要である。

また、DIGを行ったことを9割以上が肯定的に考えていた。DIGによる考えの変化は「防災意識の必要性の認識」が最も多く次いで「災害について知る、考えることが必要」が多かった。ほかにも「新たな知識の獲得」「共助の必要性の認識」のカテゴリーに分類される内容があった。参加者がDIGを行ったことで災害の現実性を強く感じ、有効性についても肯定的な評価を得られていた研究報告があることから、DIGを行い災害について新たな知識を得ることや自分事に考えられることは有効であるといえる。

これらのことより、参加者が災害の恐怖や危険性を体験することで、災害に備える必要性があることを認識し、正しい知識・技術を得て、防災への認識を高め、行動に移せるようなプログラムを実践していくことが必要であると考えられる。また、高校教育にも防災教育を組み込むことや家庭単位・町内単位で参加できる防災セミナーなどを実施し、防災意識を高め地域防災力の向上を目指したい。